一寸の虫にも五分の魂

本郷　好樹

私の散歩コースにひとりのホームレスがいる。
歳は未だ六十代に見えるが、もう少し若いかもしれない。塒（ねぐら）は多分駅の何処かだろうが、ブルーシート、ダンボール等は駅回りには見当たらないので、他にあるのかも知れない。
朝から晩まで駅のテラスの椅子に座ったり寝そべったりしているから、そんなに遠くでは無いと思う。立派なスマートフォンを何時も眺めたり拭いたりしている、それがミスマッチで面白い。残暑の頃から分厚いフード付きコートの上下と肩からハスに掛けたカバン、履物は破れたスニーカーで、全ては年期が入っていて苔が生えていそうだ。
カバンを枕にして横になっている事が多いが、晩秋の或るとき声を掛けた。
「お宅、何時もここにいるね、随分前から見ているけど、少し話してもいいですか」
「……」
「寒くないですか」
「別に、もう慣れましたよ」
「凄いね、風邪なんか引きませんか」
「鼻水は出るよ」
「何か訳はあると思うけど、家族はいるの？」
「あんた、何なの、取調べ？」
「いえ、私も住む家はあるけど、やることも無いし同じ様なもんですよ」
「私も人間だから家族はいたよ。昔はネ、今は分からんな」
「何処のお生まれですか」
「うーん、九州は鹿児島」
「えー、九州鹿児島ですか！　言葉は標準ですね」
「もう三十年以上になるからね」
「そうですか、仕事は何をしていたんですか」
「住友商事」
「凄いじゃ無いですか」
「これでも頑張ったんだがなー」
「それがどうして又」
「バブル、バブル！」

「でももう随分前じゃ無いですか」
「うん、それから色々やったけどね、全部長続きせずにパーよ」
「こういう暮らしは長いですか」
「五年前かな」
「食べる物はどうして居るんですか」
「拾ったり貰ったりだね、コンビニがあるから」
私には出来ないだろうなと思いながら話を聞いた。

後日、市役所の生活課に寄って生活保護について相談してみた。まずは本人が申請することだった。
「あのー、市役所に聞いたんだけど、生活保護の申請をしてみませんか」
「俺が？それは無理だよ、住民税払って無いもん」
「それでも方法があるかも知れないよ」
「いや、前に行った事あるんだけど、駄目だったよ」
更に勧めたが、彼は頑なに固辞した。
「一寸の虫にも五分の魂って奴でね」
そう言ってスマートフォンをいじって居た。
嘗ては有名大学を出て一流商社に勤め、頑張っただろうホームレスは多勢居るだろうが、五分の魂を口にしたホームレスを見たのは初めてであった。

女房は兎も角、三人の子供には会いたい、と本音を口にしてベンチに横たわった。冷たい北風が吹いて来て彼はヨレヨレのコートを顔に被せて手を振った。